

嫉妬と羨望の意味構造  
——嫉妬と羨望の心理学(2)——

中 里 浩 明

## Summary

### **An experiential study on semantic structure of jealousy and envy**

Hiroaki Nakazato

The aim of this study is to clarify the empirical meanings of jealousy and envy. Sixty-six subjects rated, using 40 affective verb items, whether each feeling state had the characteristics of very or rather strong jealousy and/or envy. The results suggested that each emotion has somewhat different contents. Jealousy may be labeled as the feelings of hostile anger and suspicion, whereas envy as those of desire and inferiority. In addition, the former has many more connotations. The implication of such findings is discussed.

筆者は、前稿（中里, 1991）において、最新の嫉妬と羨望に関する代表的な論説（W. G. Parrott, 1991）を、概要記述するとともに、若干の批評を展開した。これは、嫉妬と羨望の性質や概念規定をめぐるものであり、範疇としては、理論的な考察に包含される。ところで、この論攷執筆と、時期を同じくして実施していたリサーチの一つに、嫉妬と羨望の意味の構造に関するものがあり、本稿は、それを纏めたものである。こちらのほうには、経験的な研究という呼称がふさわしい。

さて、Smith, Kim, & Parrott (1988) は、嫉妬と羨望に典型的な感情状態の名詞のリストを被験者に呈示し、各々が、嫉妬もしくは羨望の特徴を、より強く示しているかを評定してもらった。すると、嫉妬は、疑惑、拒絶、怒り、損傷、喪失の恐れ、報復の願望、の特徴を持ち、羨望は、向上の動機、切望、劣等感、自己批判、の特徴を持つ、と判断されていた。従って、人々は、嫉妬と羨望を区別立てて、それらを生み出す状況を考え、また、感情の状態を捉えているようである。

さらに、嫉妬と羨望のの交絡現象を解きほぐそうとして、Parrott & Smith (1990) は、感情経験の相対的な顕在性という概念と指標を導入した。評定の変換値の利用であるが、これにより、嫉妬で顕在的なのは、不信、喪失の恐れ、自己疑惑（自信欠如）、心配、であり、他方、羨望で顕在的なのは、劣等感、切望、憤慨、向上への動機づけ、という特徴であった。この区別立ては、伝統的な定義に対応していると見なされる。

詮ずるに、上述の経験的なリサーチは、ともに、嫉妬と羨望に関する理論的考察を補強するものであり、目立つ齟齬は窺えない、と言わんとしている。

果して、その通りであろうか。ここでは、一つの手法を提起し、実施することによって、課題に小さな明りを灯したいと思う。明確な主張をなすためには、多方面からの取扱いが必要なことは、言を俟たない。

それ故、本稿の位置は、前稿における概念的検討の、いわば、補遺に相当する。

**目的** 嫉妬と羨望の意味の構造を、経験的な手法により明確にし、併せて、理論的な考察との異同を検討しようというのが、このリサーチの目的である。

**方法** 調査票は、感情の意味に関する資料を集めるためのものであると称した。二部構成で、前半は、様々な生活領域（職場や学校、家族や近隣、友人関係、恋愛など）における、嫉妬と羨望の事例を自由に記述してもらった。この結果については、本稿では触れない。

後半には、40の感情の状態を動詞で掲げた（表1参照）。そして、「それらは、『羨望』(Envy)と『嫉妬』(Jealousy)、どちらの特徴を、より強く、表していますか。または、どちらの感情のとき、より多く、経験される状態ですか。それぞれの感情の状態が、羨望だと強く思われるときは、EEを、どちらかといえば羨望だと思われるときは、Eを、また、嫉妬だと強く思われ

るときは、JJを、どちらかといえば嫉妬だと思われるときは、Jを○でかこんでください。ただし、○は、一項目につき、ふたつまでは、付けてもかまいません」という教示を与えた。

フォーマットは、「疑惑を抱く EE E J JJ」のごときものを使用し、嫉妬と羨望のいずれにも、その強度を含めて、反応できるようにした。これは、意味の内容が、両方の概念にまたがっている場合を配慮した措置である。こうした結果、例えば、「EEとJ」、「EとJ」、「JJ」という反応が可能になった。得点づけは、各々「2, 1」、「1, 1」、「2」である。なお、同種の記号へのダブルチェックは認めなかった。

被験者は、神戸女学院大学の学生で、三組に分けて、リサーチを実施した(1991年9月上旬)。記入の不備を除き、分析のために残した調査票は66であった。平均年齢は、 $M=20.53$ 歳。

**結果と考察** 表1から、嫉妬と羨望の判断頻度の差が有意な項目を列挙しよう。

優れて嫉妬の項目であると相対的に判断されていたのは、「憎しみを持つ」、「裏切られる」、「恨みを抱く」、「怒りを覚える」、「傷つけたいと思う」、「不快に思う」、である。これらの第一群に続いて、第二群として、「不信を抱く」、「疑惑を抱く」、「侮辱されたと感じる」、「敵意を持つ」、「嫌悪を感じる」、第三群として、「不公平だと憤慨する」、「是認されない感情だ」、「報復を願う」、「拒絶される」、「苦渋を味わう」、「喪失をおそれる」、「不安に駆られる」、という項目が連なる。

他方、羨望の項目であると明瞭に認められていたのは、「憧れる」、「向上を努力する」であり、

表1. 嫉妬と羨望項目の判断頻度の差

	羨望	嫉妬	差	$x^2$		羨望	嫉妬	差	$x^2$
1. 疑惑を抱く	15	87	72	***	21. 敵意を持つ	41	106	65	***
2. 悲哀を味わう	52	52	0	ns	22. 怒りを覚える	17	106	89	***
3. 所有物を切望する	87	33	-54	***	23. 罪悪感を覚える	50	44	-6	ns
4. 不公平だと憤慨する	30	90	60	***	24. 失望する	64	44	-20	ns
5. 不満を持つ	42	68	26	!	25. 不運を嘆く	75	36	-39	**
6. 自分を恥ずかしく思う	75	34	-41	**	26. 興奮を覚える	62	63	1	ns
7. 困惑する	34	54	20	ns	27. 嫌悪を感じる	29	93	64	***
8. 不快に思う	18	102	84	***	28. 憧れる	122	10	-112	***
9. 劣等感を覚える	83	55	-28	!	29. 自分を意識する	74	46	-28	!
10. 欲求が阻止される	45	62	17	ns	30. 不信を抱く	12	85	73	***
11. 喪失をおそれる	31	73	42	**	31. 向上を努力する	103	22	-81	***
12. 恨みを抱く	21	112	91	***	32. 報復を願う	25	89	64	***
13. 絶望にとらわれる	59	55	-4	ns	33. 不安に駆られる	35	76	41	**
14. 憎しみを持つ	19	116	97	***	34. 感情を抑圧する	53	61	8	ns
15. 拒絶される	28	76	48	***	35. 緊張する	48	56	8	ns
16. 確信が持てない	48	43	-5	ns	36. 自分を疑う	34	62	28	*
17. 裏切られる	12	108	96	***	37. 脅威にさらされる	45	63	18	ns
18. 是認されない感情だ	24	82	58	***	38. 苦渋を味わう	33	80	47	**
19. 心配する	42	50	8	ns	39. 傷つけたいと思う	21	105	84	***
20. 侮辱されたと感じる	23	93	70	***	40. 孤独を感じる	57	71	14	ns

註：嫉妬の頻度から羨望の頻度を引いたものが、差である。 $x^2$ 検定で、符号\*\*\*は $p < .001$ 、\*\*は $< .01$ 、\*は $p < .05$ 、!は $p < .10$ 、nsは有意差なしに、それぞれ、対応することを示す。

続けて、「所有物を切望する」、「自分を恥ずかしく思う」、「不運を嘆く」、というたぐいであった。数としては、いかにも僅少である。

ところで、嫉妬と羨望のどちらにも、比較的高い頻度を示している項目がある。例えば、「孤独を感じる」、「興奮を覚える」、「絶望にとらわれる」、「感情を抑圧する」、「緊張する」、「不満を持つ」、「失望する」、「脅威にさらされる」、「欲求が阻止される」、「悲哀を味わう」、などが、この範疇に属する。これらは、双方の感情状態に幾分かの係わりを有する特徴群である、と見なせよう。

このように、判断頻度の差を見ると、嫉妬の項目が圧倒的に優位を占める。そこで、次に、嫉妬と羨望それぞれの判断順位を眺めることにしたい（表2参照）。

嫉妬では、「憎しみを持つ」、「恨みを抱く」、「裏切られる」、「敵意を持つ」、「怒りを覚える」、「傷つけたいと思う」、「不快に思う」、の7項目が、とりわけ抜きん出た特徴とされている。

いずれも、表1の判断頻度の差において、羨望よりも嫉妬に深く関与し、上位を占めていた項目である。その意味で、二つの表間に相違は認められない。並べて眺めると、怨恨の念の痛切な項目が嫉妬を彩っていることが鮮明に出ている、と言えよう。

他方、羨望では、「憧れる」、「向上を努力する」、「所有物を切望する」、「劣等感を覚える」、「自分を恥ずかしく思う」、「不運を嘆く」、「自分を意識する」、の7項目が、同じく、特徴的である。こちらは、先に見た、表1の判断頻度の差の項目に加えて、劣位性や自意識が前面に出

表2. 嫉妬と羨望項目各々の判断順位

羨 望	嫉 妬
1. 憧れる(112)	1. 憎しみを持つ(116)
2. 向上を努力する(103)	2. 恨みを抱く(112)
3. 所有物を切望する(87)	3. 裏切られる(108)
4. 劣等感を覚える(83)	4. 敵意を持つ(106)
5. 自分を恥ずかしく思う(75)	4. 怒りを覚える(106)
5. 不運を嘆く(75)	6. 傷つけたいと思う(105)
7. 自分を意識する(74)	7. 不快に思う(102)
8. 失望する(64)	8. 侮辱されたと感じる(93)
9. 興奮を覚える(62)	8. 嫌悪を感じる(93)
10. 絶望にとらわれる(59)	10. 不公平だと憤慨する(90)
11. 孤独を感じる(57)	11. 報復を願う(89)
12. 感情を抑圧する(53)	12. 疑惑を抱く(87)
13. 悲哀を味わう(52)	13. 不信を抱く(85)
14. 罪悪感を覚える(50)	14. 是認されない感情だ(82)
15. 緊張する(48)	15. 苦渋を味わう(80)
16. 確信が持てない(46)	16. 不安に駆られる(76)
17. 欲求が阻止される(45)	16. 拒絶される(76)
17. 脅威にさらされる(45)	18. 喪失をおそれる(73)
19. 不満を持つ(42)	19. 孤独を感じる(71)
19. 心配する(42)	20. 不満を持つ(68)
21. 敵意を持つ(41)	21. 脅威にさらされる(63)
22. 不安に駆られる(35)	21. 興奮を覚える(63)
23. 困惑する(34)	23. 自分を疑う(62)
23. 自分を疑う(34)	23. 欲求が阻止される(62)
25. 苦渋を味わう(33)	25. 感情を抑圧する(61)

てきている。

それでは、表1、表2の結果を概括しよう。

先程示唆したように、嫉妬に関しては、怒り (anger) の項目群が、嫉妬の他の構成要素であると見なされきたもの、即ち、惧れ (fear) や疑惑 (suspition) の項目群を凌駕している傾向が顕著である。もっと突っ込んで言えば、喪失の惧れや諸々の疑惑にとらわれた末に、憎悪に結晶するのが、嫉妬感情の所以なのであろう。また、嫉妬概念の縁辺が、広く遠くに及ぶことも裏書きされた。

他方、羨望に関しては、従来のごとく、切望 (longing), 劣等感 (a sense of inferiority), 不満 (discontent), が明瞭な特徴として挙示されているものの、悪意 (ill-will) は水面下に潜んでいるかのごとくである。別言すれば、欲望と劣位性の趣が、ここには濃厚に見受けられる。攻撃性は、表面にはなかなか浮かび上がってこないようである。

この点が、リサーチの手法に依拠するものなのか、もっと本質的なところで由来するものの判断は、にわかにはつきかねる。ただ、「羨望」の感情状態はと聞かれれば、「羨ましく思うこと」と直結させてしまうのだけは、間違いないようである。これに対して、「嫉妬」について尋ねられると、より強烈な感情としてのイメージが鮮明に浮かび、内奥にまで、広い範囲に、察知してしまうのであろう!

とはいえ、嫉妬と羨望の実際の経験の在処といっても、我々は、未だ、一つの手法でしか検討していないわけで、他の種々の手法では、結果がいかになるかは、推論の域を出ない。従って、以上のごとき考察の基礎の上に、先に進みつつ、検討を重ねるしか仕方があるまい。

詳細については、既に、続稿を用意している。

- 註1. 調査票の前半に相当する、嫉妬と羨望の事例の自由記述の部分に、ここで触れる。被験者に、羨望の記述を求めると、Parrott (1991) の定義に照らして、間違いなく、羨望の状況を書いていた事例は、238/239であった。他方、嫉妬の場合には、61/216が、適切な事例だと判断されたのに過ぎないのである。従って、羨望概念は一定の意味内容を明確に指示するが、嫉妬概念の意味するところは幅広く、羨望などをも含み、境界線が消散していることが窺える。

#### 引用文献

- 中里浩明 (1991). 嫉妬と羨望: W. G. Parrottの類型学をめぐる——嫉妬と羨望の心理学(1)——神戸女学院大学論集 38-2, pp. 49-66.
- Parrott, W. G. (1991). The emotional experiences of envy and jealousy. In P. Salovey (Ed.), *The psychology of jealousy and envy* (pp. 3-30). New York: Guilford Press.
- Parrott, W. G. & Smith, R. H. (1990). *Distinguishing the experiences of envy and jealousy*. Manuscript submitted for publication. Cited in W. G. Parrott (1991). The emotional experiences of envy and jealousy. In P. Salovey (Ed.) *The psychology of jealousy and envy* (pp. 3-30). New York: Guilford Press.
- Smith, R. H., Kim, S. H., & Parrott, W. G. (1988). Envy and jealousy: Semantic problems and experiential distinctions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 14, 401-409.

(原稿受理 1991年10月25日)